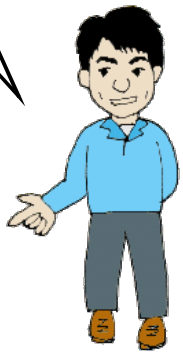
平成19五月のスポット展示

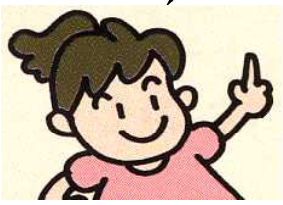
中世文書を読む（三）

毛利輝元の文書②



これは、戦国大名の
毛利輝元が書いた手紙です。
この展示では、
この手紙を題材に、
手紙を読み解く過程と
その楽しさを
みなさんと共有したいと思います。
番号順（①～⑬）に見ていってね。

①



くずし字じゃあ、
何が書いてあるか
わからんよ。
どう読むん？

②

今のことばに
直したら、
このようになるよ。

【現代語訳】

恐々謹言。

右馬頭

八月七日輝元（花押）

洞春寺が石組工事を
お命じになりました。そこで、中村方
を派遣するように依
頼されたので、申し
入れます。
御承諾くださるとう
れしいです。

元春

参

御宿所

③

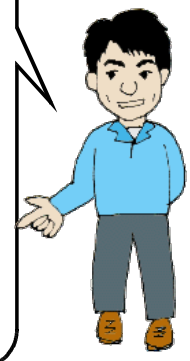
ふーん。じゃあ、この手紙、いつ書かれたん？
今回は、何に注目するん？。花押、それとも登場人物？。

④

今回は、登場する人名や輝元の花押から、時代を推理したいと思います。

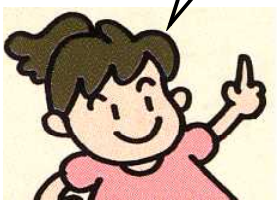
毛利輝元は永禄八年（一五六五）に元服（成人）し、「少輔太郎輝元」と名乗ります。「右馬頭」を名乗るのは、天正三年（一五七五）頃からです。

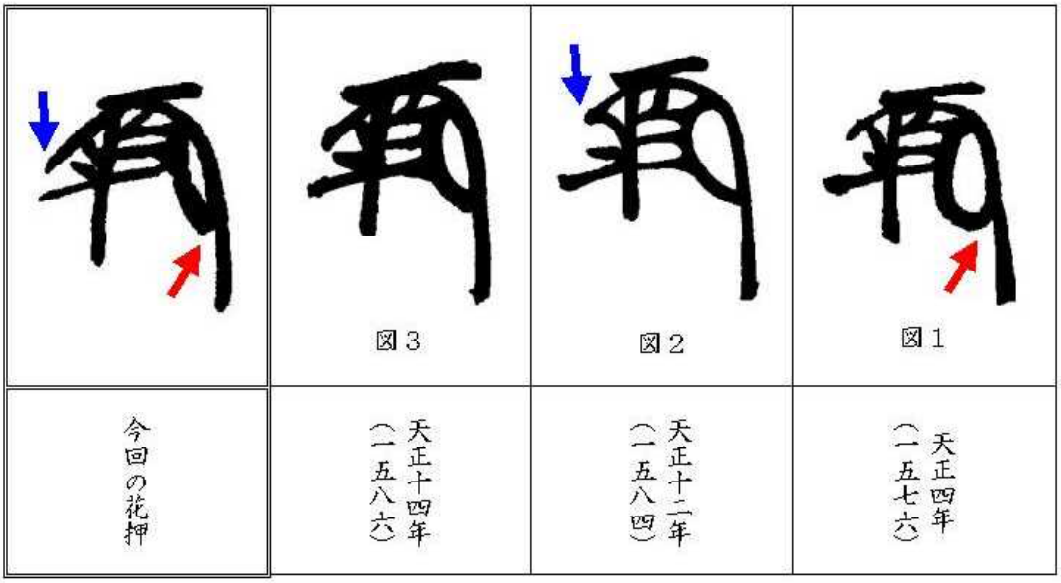
宛先の吉川元春は輝元の叔父で、天正十四年（一五八六）十一月に死亡します。



⑤

なるほど！
じゃあ、この手紙は天正三年～十四年（一五七五～八六）の間に書かれたんじゃね。





矢印↓↑は、今回の花押との相違点を示しています。

⑥

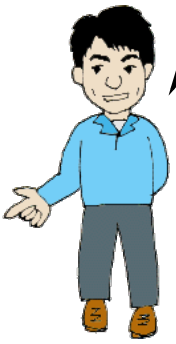
次に、輝元の花押に注目します。
上の表の、
図1は、前回（第2回に）紹介した天正四年（一五七六）のもの、
図2は、第一回に写真パネルで紹介した天正十二年（一五八四）もの、
図3は、今回初めてお見せしますが、天正十四年（一五八六）の、それぞれ花押です。

これらと見比べると、
ここに展示した輝元の手紙の花押は、
図3の天正十四年のものに最も似とるじゃろ。
じゃけぇ、
この手紙は天正十四年（一五八六）頃に書かれたんじゃないかなぁ。

⑦

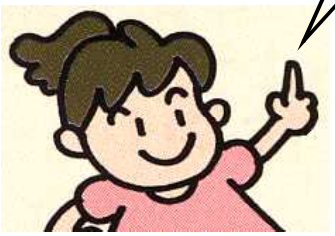
洞春寺って、なに？。

⑧



毛利輝元のおじいちゃん・元就の菩提寺です。
今の安芸高田市吉田町の郡山城の麓にありました。
洞春寺は、
「「石組」を築きたいので「中村方」を派遣してほしい」
と、輝元にお願いしました。
そこで、輝元は元春おじちゃんに申し入れたのです。
どうやら、「中村方」は元春の配下にいたようです。

⑨



「中村方」って誰？。

⑩

「石組」の工事を依頼されているので、石組・石垣づくりのプロフェッショナルと考えられます。
それも、吉川氏と関係を取り結んだ職人集団。

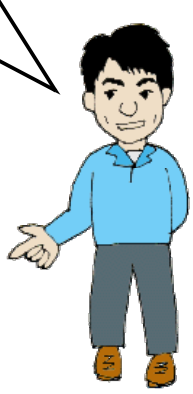
ところで、吉川氏と関係がある石垣職人といえば、「石つき之もの共」（石築の者共）と呼ばれた人たちがいます。
彼らは、天正十九年（一五九一）十月に広島城下町の堀川の運河を造っているし、翌年には厳島の石垣も築きました。

史跡吉川氏城館跡　吉川元春館跡の石垣
（館内に見える屋根は、復元された台所・倉庫のもの）

現在の北広島町にある吉川元春館跡や元春の長男元長の菩提寺万徳院跡の石垣も、彼ら「石つき之もの共」が造ったと推定されています。
吉川元春館の石垣は天正十三年（一五八五）五月頃、万徳院の石垣は天正三年（一五七五）頃の築造と思われます。

⑪

「中村方」と
「石つき之もの共」は
同じ職人なん？



⑫

広島城下町の堀川とは、「平田屋川」のこと。
平田屋川は
平田屋惣右衛門が開削したことが知られとる。
平田屋惣右衛門は、
吉川氏の所領の出雲国の平田の出身で、
平田の代官を務め、
「平田屋」と名乗って経済活動を行い、
杵築（出雲）大社の「御供宿」を経営し、
後には毛利氏の特権商人になりました。
いわば、多角経営企業体を運営する
武士的商人でした。
つまり、「石つき之もの共」は、
平田屋惣右衛門が率いる「企業体」の
土木部門に当たると思われます。

⑬

そして、この平田屋惣右衛門は、
江戸時代には広島城下町の町人頭を務めますが、
その子孫は後に没落して平田屋町を立ち退き、
「中村」と名乗ります。
平田屋惣右衛門の本姓は「中村」じゃったんじゃ。
以上のことから、
「中村方」と「平田屋惣右衛門」は同一人物で、
その土木部門が「石つき之もの共」であったと
考えています。